埼玉県立
川口北高校

学校改革

目指す学校像を明確にし人間的成長を促す真の文武両道を具現化

◎目指す学校像は「あらゆる教育活動をとおして、人に親切に、人を思いやる心を常に持ち、日本及び国際社会に貢献できる生徒の育成」。「学力向上」と「体力・精神力の充実」を二大柱に文武両道の教育活動を展開し、学業と部活動の両面で実績を伸ばしている。

設立
1974年（昭和49）年

形態
全日制／普通科／共学

生徒数
1学年約360人

13年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、東北大、筑波大、埼玉大、千葉大、東京学芸大、東京農工大、一橋大、横浜国立大などに54人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、東京理科大、早稲田大などに延べ944人が合格。

住所
〒333-0831
埼玉県川口市木曽呂1477

電話
048-295-1006

Web Site
http://www.kawaguchikita-h.spec.ed.jp/

変革のステップ

背景
◎学校全体の指導の軸がなく、学習指導や部活動の指導は学年団や個々の教師に委ねられていた
STEP 1

実践
◎目指す学校像を明確にし、グランドデザインを作成、共有。全ての教職員で連携しながら文武両道の理念を具現化
STEP 2

成果
◎2013年度入試で国公立大合格者数が54人と過去最多に。複数の部が全国大会や関東大会に出場するなど活躍
STEP 3

学校全体の指導の軸がなく生徒の力を伸ばしきれない

埼玉県立川口北高校では、2007年頃から、目指す学校像を基軸にした指導体制の体系化を進めてきた。その頃の同校は、私立大を中心に進学実績が高かったものの、国公立大合格者数は伸び悩んでいた。部活動も、優れた実績を上げる部もあったが、「学校全体で盛り上げる」ムードは薄かった。07年度に赴任した教務主任の村上茂先生は、当時を次のように振り返る。

「個々の教師や学年団の単位では、担当教科や部活動の指導などで最大限の努力をしていたと思います。それでも、進学や部活動で生徒をもっと伸ばせる余地が残っていたのは、学校全体として、育てたい生徒像を明確にした指導がされていないからではないかと思いました。例えば、カリキュラムを検討する場合でも、『大学入試に直結する科目を中心に履修させればよい』という考え以上に、深く検討されることはありませんでした」

村上先生と同年に赴任した進路指導主事の篠田俊文先生も、次のように話す。

「当時は、『生徒に国公立大合格を期待するのは厳しいのではないか』という雰囲気でしたが、模試の結果などを見ると、生徒の資質は十分にあると感じました。私たち教師が生徒の力を伸ばせていないのではないかという

思いが、だんだん強くなっていきました」

小さな変革を積み重ねながら目指す学校像を議論

目指す学校像を明確にして、学校全体で生徒を指導する体制を整える必要があるのではないか――。そう考えた村上先生や篠田先生らを中心として、学校のグランドデザインの模索が始まった。09年度には「高い志のもと進学校としての確かな学力と健全な心身を養い、文武を兼ね備えた21世紀の社会に貢献できる生徒の育成」が掲げられ、「学力向上」と「体力・精神力の充実」を柱とする文武両道の理念が明確になっていった。

このような理念は、実際の改革を進める中で形づくられてきた。例えば、実践が進められた篠田先生の学年では、3年生で「HR合宿」を実施した。富士山麓で2泊3日、合宿形式で受験勉強に取り組む行事で、以前、行われていたのだが、中断していた行事である。更に、健全な心身を養う一環として生活指導に力を入れ、それまでは黙認していた服装の乱れを厳しく注意するようにした。

「受験は団体戦とよくいわれます。最後まで全員で頑張る雰囲気をつくるのに『HR合宿』は絶好の機会だと考えました。また、私の学年はスタート時より、先輩学年から受け継いだ『チーム川北』というキーワードを常に意識しました。学年団が一体となって生活指導や学習指導、学校行事などに取り組むうちに、生徒にも『チーム川北』が浸透していきました」（篠田先生）

実践での成果が見えたことにより、育てたい人間像の具体化の議論も進んだ。10年度には、「地域のリーダーになり得る人」「心身ともにバランスのとれた人」「国際社会に貢献できる人」「生涯にわたり学び続ける人」という4つの人間像が職員会議で提示され、学校づくりの軸が学校全体で共有された。

生徒にとって良いことならば今までの形を壊してもよい

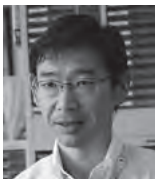
10年度に赴任した田村和夫前校長は「この方向性で取り組んでいく」と明言。目指す学校像が「あらゆる教育活動をとおして、人に親切に、人を思いやる心を常に持ち、日本及び国際社会に貢献できる生徒の育成」と固まり、進むべき道が明確になった。12年度に赴任した渡邉秀昭校長もこの方向性の継続を明言し、改革は前進を続けてきた。生徒指導主任の森田洋正先生は、込められた思いを次のように話す。

「何かに対して、努力やつらい経験をし、痛みを知っている人間こそ、他人の痛みを理解し、助けることが出来るのだと思います。勉強、部活動も含めて全ての生活の場面で自ら考えて、努力し、苦しい思いも乗り越えていく経験を通じ、率先して他人を助けられるリーダーを育てていきたいと考えています」

森田先生と同年に赴任した鈴木良典教頭の提案で、進路指導部が生徒の意欲・状況を踏まえた3年間を見据えた進路指導計画を作成した。

埼玉県立川口北高校教頭
鈴木良典 すずき・よしのり
教職歴35年。同校に赴任して3年目。「『今いる目の前の生徒の力をいかに伸ばすか』に組織として取り組めるよう支援したい」

埼玉県立川口北高校
森田洋正 もりた・ひろまさ
教職歴32年。同校に赴任して3年目。生徒指導主任。「学ぶことを止めた時、教えることを止めなければならない」



埼玉県立川口北高校
村上 茂 むらかみ・しげる
教職歴27年。同校に赴任して7年目。教務主任。「生徒には、他者の幸せを自分の喜びと感じる人間に育ってほしい」

埼玉県立川口北高校
篠田俊文 しのだ・としふみ
教職歴14年。同校に赴任して7年目。進路指導主事。「青は藍より出でて藍より青し。生徒には常に自分を超えていってもらいたい」

埼玉県立川口北高校
浅見礼文 あさみ・れぶん
教職歴5年。同校に赴任して2年目。2学年担任。「生徒のやる気や人間的成長を後押ししていきたい」

「目指す学校像の具現化のために、3年間でどのような指導をすればよいのかを全校で目線合わせしたいと考えました。面談、模試、行事の時期について、『なぜこの時期が良いのか？』と考えながら作成したことが良かったと思います。指導の意義も含めて、全校で共有できました」（鈴木教頭）

授業時間の見直しも、学校全体での「学び」を考える機会となった。新課程に伴う授業時間の増加への対応などのため、授業時間を65分から55分に短縮することが検討された。教師が分担して55分授業を行う各校を視察し、教師全員で検討を重ねた。村上先生は、検討会でのある言葉が忘れられないという。

「『授業の長さを変えられるとは思わなかった』という言葉です。教育は与えられた形の中で行うものだ、と考えていた教師は少なくなかったと思います。55分授業導入の検討によって、『生徒の育成にとって良いことならば、今までの形を壊してもよい』という考え方が浸透し、改革が加速した実感があります」

55分授業の検討は、教師が文武両道のあり方をより深く追求する機会にもなった。

「55分授業が導入されると、授業終了が15分遅くなります。本校は午後7時完全下校と決まっているので、部活動の時間が短縮されることになります。下校時刻を15分延ばす案も出ましたが、その時に前校長が『時間が短くても、学習も部活動も工夫して結果を出すのが、本校の文武両道です』と明言されたのです。ここで、私たちも改めて、本校が掲げる文武両道の本質を見つめ直しました」（鈴木教頭）

55分授業の導入の他にも、自学自習習慣の定着や、きめ細かい補講の実施など、生徒の学力向上への取り組みが重ねられた。

学習にも部活にも全力で取り組むことが相乗効果を生む

同校が掲げる文武両道は、学習と部活動の両立という意味ではない。学習にも部活動にも励むことによって、「主体性や実行力」「課題発見・課題解決能力」「チームで働く力」が育ち、人間的な成長を促すと考える。森田先生は次のように説明する。

「本校の生徒は、小・中学校では勉強でもスポーツでも苦労せずにある程度の結果を残せた子どもが大半です。それゆえに、『もっと出来るのでは？』と更に高みを目指して、自分の殻を破ってほしいと思うのです。学習にも部活動にも全力で取り組むことは、体力的にも精神的にもきついでしょう。しかし、そこから逃げずに、自分なりに工夫しながら小さな成功を積み重ねることによって、忍耐力や粘り強さが育ち、文と武の相乗効果が生まれると私たちは考えます」

文武両道の具現化には、教師が生徒を丁寧に見取ることが欠かせない。2学年担任の浅見礼

図　KAWAKITA　キャリアツリー（2013年度）

目指す学校像に向けて、キャリア教育のとらえ方や理念と共に、教科や組織の役割が示されている。＊上記は、構造のみを編集部が簡略化したもの。具体的な内容や役割が書かれた正式な図は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧ください。

文先生は次のように話す。

「学習面において、課題をこなしきれずに余裕をなくしている生徒がいないか、生徒の内面を捉えられるように気を付けています。生徒の部活動の顧問とも生徒の様子を共有しながら、声の掛け方がバラバラにならないように指導方針を統一しています」

面談も密に行う。年5回の面談期間ではそれぞれ二者面談、三者面談、部活動での面談などを通じ、生徒を多面的に把握する。また、同校では校長自らが生徒全員に面談を行うが、これは、一人ひとりの生徒が高い目標を掲げるためにも効果があるという。

こうしたきめ細かい指導により、13年度大学入試では、国公立大合格者が過去最多の54人となり、部活動では、男子バスケットボールがインターハイ出場、弓道、水泳が関東大会出場、男子ハンドボールが埼玉県ベスト4、女子ハンドボール、サッカー、ラグビーがベスト8など、文武ともにめざましい結果を出した。

全教職員の力を合わせて生徒を育てていく

同校の学校改革が成功した背景には、教師間で目指す学校像、そのための手立てが共有されていたことがある。共有化に大きく貢献したのが「キャリアツリー」（図）の作成だ。目指す学校像を明確にし「人づくり」に学校全体で取り組む同校の実践は、キャリア教育としても捉えられる。その教育に、校内の全教職員がかかわっていることを示したのが「キャリアツリー」だ。

「キャリアツリー作成によって、教師間の連携と自己肯定感が生まれました。生徒の人間としての成長において、自分が担う役割が明確になると同時に、皆で力を合わせて生徒一人ひとりを育てているのだという構造を共有できたのです。部活動指導や進路指導に直接かかわらない教職員も、部活動や進学で生徒が活躍するのをますます喜び合うようになりました」（篠田先生）

テニス部の顧問を務める浅見先生も言う。

「学業と部活動で、時間を取り合うようなことはありません。全ての教育活動で生徒を育てていると実感しているからこそ、どの部活動でも学習指導が大切だとしっかりと伝えているのは本校の良さだと思います」

同校が今後の課題として挙げるのは、生徒の主体的な学びを引き出す学びの実現だ。授業改善も含めた量に頼らない指導のあり方を、研究授業などを通じて模索したいと考えている。

「体制が整ってきた現状に甘んじるのではなく、生徒のために有益な取り組みになっているのかを検証しながら、組織の力で更に発展させていきたいと思います」（鈴木教頭）

若手教師が語る、指導変革への情熱

生徒が「伸びたい」と思った時に伸ばせるプロの教師を目指したい

２学年担任 **浅見礼文**

本校に赴任して２年目になります。着任時には既に改革が浸透しており、その指導体制の中で進めれば生徒は動いてくれましたが、だからこそ危険を感じました。さまざまな施策が実施されることになった経緯や意図を把握せず、ただ取り組みを繰り返すことになれば、受け身な教師になる恐れがあると思ったからです。生徒を「受け身になるな」と叱咤（しった）する前に、自分が責任と主体性を持って取り組まなければならないと痛感しています。

本校の改革を推進してきた村上先生や篠田先生からは、「生徒を育てるために必要だと思うなら、今までのシステムでもどんどん変えて、学校全体としての合意を得ながら新しい一手を打ってほしい」と言われています。プレッシャーもありますが、生徒に必要なことを考え、実行に移せる環境があることには、やりがいを感じます。

私が目指す教師像は、「人を鍛えられる教師」です。生徒が「こう伸びたい」と思った時に伸ばせるプロの教師でありたいと思います。現段階では、担当教科である地歴や部活動での指導力を磨いて、「教師に追い立てられるのではなく、自ら追い込む生徒を育てる指導」を実現していくことが目標です。生徒一人ひとりをよく見て、生徒同士も互いに刺激を受けながら、将来の高い目標に向かう場をつくっていきたいと思っています。

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。
2010年10月号指導変革の軌跡「和歌山県・私立和歌山信愛女子短期大学附属中学・高校」など
▶▶▶ http://berd.benesse.jp → HOME ＞ 教育情報誌（高校向け）